

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：32704

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K13449

研究課題名（和文）再構築される沖縄ディアスポラ：ホームランド・沖縄からの施策に着目して

研究課題名（英文）Reconstructing the Okinawan Diaspora: Focusing on Initiatives from the Homeland Okinawa

研究代表者

藤浪 海（Fujinami, Kai）

関東学院大学・社会学部・講師

研究者番号：90819947

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、沖縄ディアスポラの構築に向けたホームランド（沖縄）側からの取り組みについて検討し、ナショナルな水準ではマイノリティとして位置づけられる沖縄の立場を越境的ネットワークのもとで乗り越えようとするものとして、それらの取り組みが推進されていることを明らかにした。具体的には、「困難に陥る沖縄を越境的に助けてくれる存在」として世界のウチナンチュと沖縄社会とのネットワークが意義づけられていること、そしてそのもとで精神性を基軸とした拡張的ディアスポラという発想が生み出され、とくに若い世代の県民の沖縄アイデンティティの活性化が目指されていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

エスニシティ（民族性なるもの）がいかに社会的に構築されるかをめぐっては、方法論的ナショナリズム、つまり国民国家という枠組みに基づいて、その理論化がなされてきた。それに対して本研究では、沖縄ディアスポラを事例として国境を越えてエスニシティが編成される力学を明らかにすることで、エスニシティ理論における方法論的ナショナリズムの乗り越えを図った。加えて、沖縄ディアスポラの構築をめぐる取り組みの背景に、日本と沖縄の間の不公正な歴史的関係性が大きく関わっていることを明らかにすることを通じて、日本と沖縄との関係形成に向けた社会的示唆を提示した。

研究成果の概要（英文）： This study examines initiatives from the homeland side to construct the Okinawan diaspora and reveals that these initiatives seek to overcome Okinawa's position as a minority at the national level through transnational networking. Concretely, the network between Okinawan society and the world's Uchinanchu is valued as "a transnational help to Okinawan society in difficulty," and the idea of an expanded diaspora based on spirit is created and the revitalization of Okinawan identity, especially among the younger generation of Okinawan citizens, is aimed at.

研究分野：社会学

キーワード：移民 トランスナショナリズム ディアスポラ エスニシティ ポストコロニアリズム ネットワーク

1. 研究開始当初の背景

沖縄は、有数の移民送出国としての歴史をもつ地域である。その沖縄で 1980 年代になると、かれら移民とその子孫が改めて「世界のウチナーンチュ」¹として「発見」されるようになり、以後、「世界のウチナーンチュ」と沖縄社会との越境的ネットワークを強化し、グローバルに沖縄エスニシティを活性化させる取り組みが、行政や企業、教育団体、文化芸能団体等によっておし進められてきた。このようにグローバルな水準でエスニシティが編成されていく様態を検討することは、学術的にみて、従前のエスニシティ理論における方法論的ナショナリズムの乗り越えの可能性を開くものである。またこれらの取り組みには沖縄と日本の間の不公正な関係の歴史も大きくかかわっていることも踏まえれば、こうした検討を進めることは、米軍基地問題などとも関係しつつ、また異なる角度から沖縄と日本の関係性を批判的に捉える道をも開いてくれるものとなっている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ホームランド(沖縄)側からの各離散集団に向けた沖縄エスニシティ活性化の取り組みの事例から、沖縄ディアスポラの越境的な社会空間のなかでのエスニシティの変容のあり方を明らかにすることにある。先に述べたように沖縄では、各離散集団との越境的なネットワークのもとにグローバルに沖縄エスニシティを活性化させる取り組みがなされている。これらの取り組みはなぜ/いかなる力学のもとおし進められ、そしてそれは各離散集団や沖縄自体にどのような影響を及ぼしているのだろうか。本研究ではこの問いをもとに、日本社会における沖縄の歴史的・構造的な位置づけを踏まえつつ、加えて行政・経済界・教育界・文化芸能界・市民団体(帰還移民を含む)などメゾレベルのアクターの論理に肉薄することで、越境的なエスニシティ再編成の力学をより立体的に描き出すことを目指した。

3. 研究の方法

離散集団に対する取り組みを推進する沖縄社会側の力学に関して、メゾレベルのアクターとして行政と教育界、経済界、文化芸能界、市民団体を取り上げ、各団体・個人に対しインタビュー調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 沖縄県庁による世界のウチナーンチュに関する政策

「世界のウチナーンチュ」との越境的ネットワークの構築への取り組みを展開するアクターのひとつとして、1990 年から現在に至るまで計 7 回の世界のウチナーンチュ大会を実施し、また沖縄ルーツの留学生の受け入れ事業や沖縄移民に関する社会教育事業、離散集団に対する沖縄芸能の普及などに取り組む沖縄県庁が挙げられる。沖縄からの集合的な移住はその終わりからすでに 50 年以上がたつ。その中で沖縄県庁はいかなる意図をもち越境的ネットワークの構築を推進しているのだろうか。

調査から明らかになったのは、ナショナルな水準ではマイノリティとして位置づけられる沖縄の立場を、越境的ネットワークのもとで乗り越えようとする県庁の意図である。メディアや国家、経済界の論理が複合的に重なり合い始まったこの施策において、世界のウチナーンチュは「困難に陥る沖縄を越境的に助けてくれる存在」として意義づけられるようになった。そしてこうした見方のもとでこの施策が 2 つの特徴的な構想(精神性を基軸とした拡張的ディアスポラの発想、県民の沖縄アイデンティティの活性化)をもちながら展開され、そのマイノリティとしての立ち位置を覆していく可能性が拓かれていた。

(2) 世界のウチナーンチュの日の発案に関する帰還移民の意図

2016 年 10 月 30 日、歴史的に多くの移民を送り出してきた沖縄で、県公式の新たな記念日として「世界のウチナーンチュの日」が制定された。この記念日は「沖縄と沖縄に縁のある人々を祝い誇る日」として、沖縄アイデンティティの集合的な形成を促そうとするものであるが、ここで注目したいのはその発案者が南米から沖縄への 2 人の帰還移民であるという事実である。彼らはなぜ、この記念日を発案するに至ったのだろうか。

両氏のライフストーリーから明らかになったのは、デカセギとは異なるその特有の帰還経験が沖縄ディアスポラの今後の展開に関する構想を導き、世界のウチナーンチュの日の発案に至っていることである。沖縄への帰還を通じて得たハイブリッドなアイデンティティやルーツを知る喜びこそが、反差別に基づく拡張的ディアスポラの構築という構想に結びつき、越境的な経済交流の推進によりその実現が模索されるに至っていたのである。

(3) 沖縄県立図書館による世界のウチナーンチュに関する取り組み

よく知られている通り沖縄県立図書館は、戦争で資料を焼失し、世界各地の沖縄系の人々の助

力によって再建してきた歴史をもつが、現在は出移民に関するさまざまな取り組みを行っている。たとえば2016年の第6回世界のウチナンチュ大会では、「自分のルーツを知りたい」という沖縄系の人々に対してルーツ探しのサービスを初めて実施し、2017年にはオアフ島での沖縄フェスティバルでもルーツ探しを行った。2018年には、図書館移転を契機に館内に「移民資料コーナー」を設置するようになり、2022年には移民渡航記録データベースを公開し、世界中の人々が祖先の渡航記録にアクセスできるようになった。このような取り組みは、沖縄系の人々がそのウチナンチュとしてのルーツを認識できるようにするものであり、まさにグローバルな水準で沖縄ディアスポラを構築する取り組みであるといえる。しかしなぜ、沖縄県立図書館はこのような海外在住者に向けたサービスを展開するようになったのだろうか。

調査から明らかになったのは、ハワイと沖縄の地域的文脈に加え、図書館というアクターとしての論理のもとでこうした取り組みが始まり、ハワイ・沖縄のみならず南米諸国や在日南米系移民へも越境的に取り組みが拡大していることである。ハワイにおけるルーツ探しの盛り上がりという文脈、沖縄における戸籍の焼失という文脈、米軍基地問題を背景とした沖縄振興一括交付金、そして当該テーマは図書館の役割が見えやすいという図書館というアクターとしての論理などが重なることで、こうした取り組みが展開・拡張されていたのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 藤浪海	4. 巻 28
2. 論文標題 帰還移民と世界のウチナンチュの日	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 移民研究年報	6. 最初と最後の頁 63-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤浪海	4. 巻 14
2. 論文標題 「世界のウチナンチュ」と越境的ネットワーク 沖縄県の政策に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 移民政策研究	6. 最初と最後の頁 142-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤浪海	4. 巻 19
2. 論文標題 越境する生活史と当事者支援 在伯ウチナンチュ・在日ブラジル人女性としての経験を読み解く	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 移民研究	6. 最初と最後の頁 63-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 藤浪海
2. 発表標題 コロナ禍で問い直されるフィールドワーカーの視野と前提 横浜市・川崎市臨海部に暮らす移民調査の経験から
3. 学会等名 関東社会学会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤浪海
2. 発表標題 地域社会とつながりあう在日ブラジル人 「沖縄系」としての生活史に注目して
3. 学会等名 日本移民学会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藤浪海
2. 発表標題 移民研究とディアスポラという視点
3. 学会等名 日本移民学会（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 野入直美・藤浪海・眞壁由香	4. 発行年 2022年
2. 出版社 琉球新報社	5. 総ページ数 241
3. 書名 わったー世界のウチナーンチュ！ 海外県系人の若者たちの軌跡	

1. 著者名 文貞實・山口恵子・小山弘美・山本薫子・藤浪海・玉野和志・羽淵一代・結城翼・桐生正幸・野坂真・朝倉美江	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 266
3. 書名 社会にひらく社会調査入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------